

卒業式に見る袴の現代的着装の研究 V : 伝統的な視点から考える和装教育

著者	田中 淑江, 高橋 由子, 長谷川 紗織, 大塚 絵美子, 宮武 恵子
雑誌名	共立女子大学家政学部紀要
巻	65
ページ	47-58
発行年	2019-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003240/



卒業式に見る袴の現代的着装の研究 V

—伝統的な視点から考える和装教育—

A study of wearing modern hakama at graduation ceremony V
— From traditional viewpoint —

田中淑江 高橋由子 長谷川紗織 大塚絵美子 宮武恵子
Yoshie TANAKA, Yuko TAKAHASHI, Saori HASEGAWA, Emiko OTSUKA
Keiko MIYATAKE.

1、はじめに

女子大生の卒業式の袴姿は、明治期の女学生の通学及び式服での袴着用を源流とする。

その後、女学校での制服制定や洋服の着装により袴着用は一時衰退するが、1980年代前半より再び復活し、現代では卒業式の装いとして定着している。その装いは現在までの約40年の間に多様性に富んだものへと変化を遂げている¹⁾。

本研究は先行研究「卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ」の継続研究で、平成25年度(2014)の卒業式より調査研究を始め、今回で5年目となる。近年、女子学生が卒業式に着用する袴姿は時代と共に変化した。その変化の特徴や要因を多面的に取り上げるため、伝統的な和服を対象として調査研究を行う被服平面造形研究室と、現代ファッションを対象として商品企画及びデザインについて調査研究を行う被服意匠研究室の両研究室により共同研究として進めてきた^{2) 3) 4) 5) 6) 7)}。

これまでに明らかになったことは、伝統的視点からは①従来卒業式の式服は紋付無地の長着であったが、それを着用する学生はほとんど見られなくなり、レンタルで販売される華やかな小振袖が主流となった。書籍による調査でも卒業式に用いられる長着の定義は変化し、近年では長着は多様化した⁸⁾。②女子大生は卒業式が

式典と分かっているにもかかわらず、式典での装いの知識は知らず、自由で個性を求めるとなり、書籍の記述も時代と共に変化した⁹⁾。③学生の着付けは人に任せる者が主流であるので個性を表わすことはなく、従来の式典に用いられる着付けがそのまま継承されていた。また書籍による調査も従来の着付けと現代ではさほど大きな変化はないことが明らかとなった。着付けの問題では、着くずれは多くみられた。卒業式にふさわしい凛とした気品ある袴姿であるためには、袴に関する講義に着付けも含み、着崩れを直す術を覚えることを教えることを今後の課題とした¹⁰⁾。

次にファッション的視点からは、①袴着装のための情報収集の主たるツールである袴カタログはファッション雑誌と同じ手法で計画・掲載がされている。②女子学生は、日頃の装いと類似した感覚・テイストで袴着装をしている。③経年で分析することにより、初年度の分析で少数に見られた傾向が、次年度はわずかに増え、さらに次々年度にさらに増えるという流行現象の一端を導き出した。一方、レンタル業者へのヒヤリング調査も行い、業界独特の企画・生産・提供のプロセスとともに実態が理解できた。これらのことから、提供する側、着装する側ともにファッションの概念で捉えることが必要であると結論づけた。

本稿ではこれらの拙稿結果と平成29年度



図1 共通データ写真

(2018) に開催された卒業式の新たな資料を用いて、時代にあった和装教育を考えることを目的とする。そのために、平成25年度(2014)から平成29年度(2018)の卒業式の女子大生の袴姿のデータを比較し、伝統的な視点から装いの変化の特徴と要因を考察する。

2、研究方法

平成29年度の資料として2018年3月15日に行われた共立女子大学の卒業式当日、被服学科学生85人を対象に、卒業式当日の装いの撮影を行った。撮影箇所は先行研究¹¹⁾と同様に1全身写真、2全身背面、3全身右側面、4上半身、5衿元、6足元、7頭部、8鞆、9ネイルの9か所である(図1)。なお、一次資料として用いる袴姿を撮影した写真は、従来と同様に両研究室の共通資料とする。さらに卒業年度の被服学科所属の

学生に卒業式当日の装いの調達方法や、着付け、卒業式に対する意識についてアンケートを行った。

また、平成29年度の装いと比較するため、これまでの先行研究の資料を使用した¹²⁾。

3、卒業式における袴姿の実態

3-1 平成29年度の傾向

卒業式当日に撮影をした写真資料を用い、平成29年度の装いの傾向分析を行う。まず、袴下の長着をみてみると、小振袖58%、振袖23%、小紋17%となった(図2)。袴は無地に刺繍入りが51%、無地34%、ぼかし4%であった(図3)。これまであまり見られなかった袴も散見され、袴に柄があるものや、袴の裾あたりに2本の線が入っている袴、袴の前面と後面で色が違うものなどがあつた(図4)。半衿は無地が59%、刺

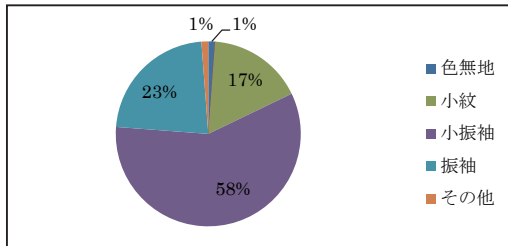


図2 平成29年度の長着の種類

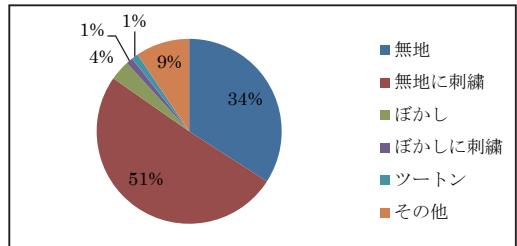


図3 平成29年度の袴の種類



図4 左から柄のある袴、線入りの袴、前面と後面で色が違う袴の正面、右側面、背面

繡入りが36%、染め（プリントを含む）が5%となった（図5）。伊達袴は86%の学生が着用しており、種類は地紋39%、2色18%、無地と柄がそれぞれ14%であった（図6）。帯では差し色及び反対色になる地色に柄の帯が51%、差し色及び反対色になる無地の帯が22%、袴と同系色の柄の帯が20%であり、7割以上の学生が差し色及び反対色となる半幅帯を使用していた（図7）。履物は草履が49%、ブーツが45%、靴その他が6%と草履を着用している学生が多い傾向であった（図8）。靴やその他の中に、これまで見られなかった足袋型の靴を履いた学生が2名、柄のあるヒール靴が1名、厚底の靴が1名と多様な履物を着用していた（図9）。足袋は全体の51%に着用がみられ、そのうち91%が白足袋を

着用しており（図10、図11）、白足袋にワンポイントとレース足袋をそれぞれ2名ずつ着用していた。靴は巾着が35%、和装用ハンドバッグが19%、洋装用バッグが16%であった（図12）。その他に、装飾品をつけている学生の着用例を挙げると、これまでもみられたように、袴紐の結び目の周辺に飾りをつける学生がいた。つまみ細工やコサージュが主につけられていたが、タッセルやブローチを用いる学生も見受けられた（図13）。他には、長着の下にブラウスを着用している学生が2名おり、このような装いはこれまでの調査ではみることがなかった（図14）。以上のようなその他の装飾品の着用は少数の学生にみられ、89%の学生に着用はみられなかった。

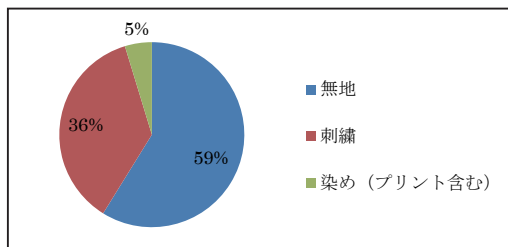


図5 平成29年度の半衿の種類

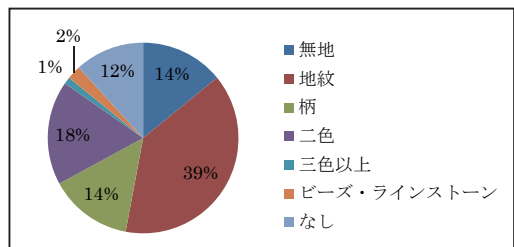


図6 平成29年度の伊達袴の種類

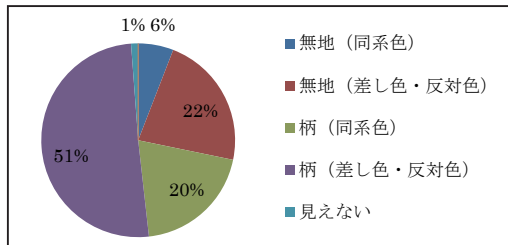


図7 平成29年度の帯の種類

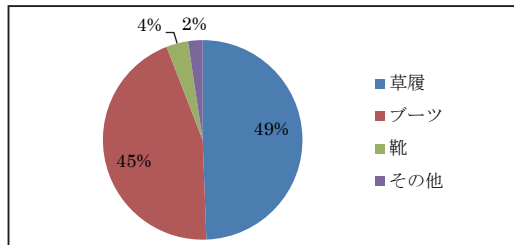


図8 平成29年度の履物の種類



図9 左から足袋型の靴、柄のあるヒール靴、厚底の靴

卒業式に見る袴の現代的着装の研究V

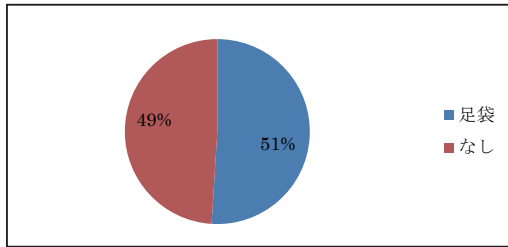


図10 平成29年度の足袋の有無

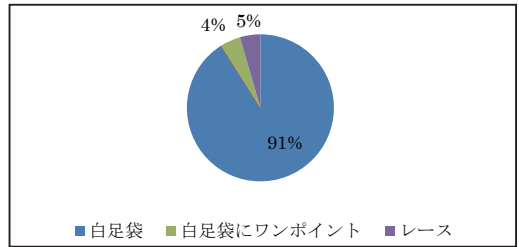


図11 平成29年度の足袋の種類

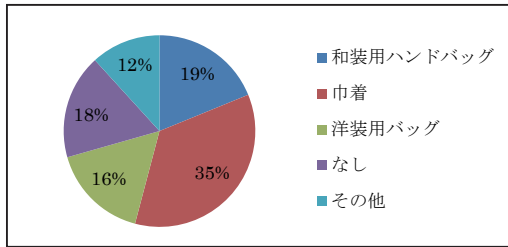


図12 平成29年度の靴の種類



図13 左からつまみ細工、コサージュ、タッセル、ブローチ



図14 ブラウスを着用していた学生2名

3-2 平成25年度の装いととの比較

本研究を始めた平成25年度と平成29年度の袴の装いの様子を比較する。まず長着では、平成25年度では小紋、振袖、小振袖の割合がそれぞれ

れおおよそ3割であったのに対し、平成29年度には6割の学生が小振袖を着用するようになった(図15)。袴は無地が多い傾向に変わりはないが、無地に刺繍入りの袴を着用する学生が5

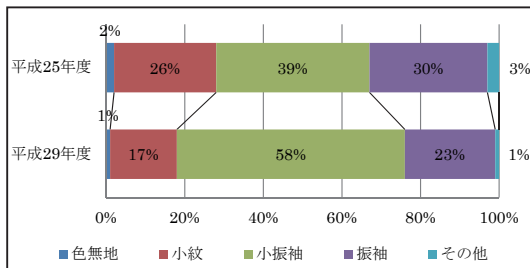


図15 長着の種類

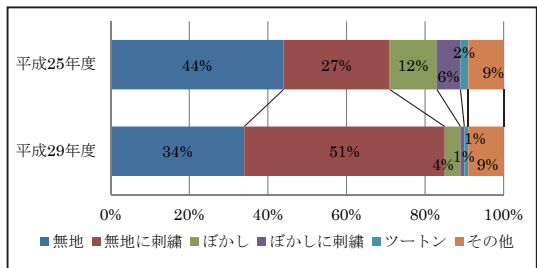


図16 袴の種類

割に増加した(図16)。半衿は無地が多い傾向で、6割に増加した(図17)。伊達衿は平成25年度では入れている学生と入っていない学生が半数ずつだったのに対し、平成29年度には8割以上の学生が伊達衿を使用するようになった(図18)。使用される伊達衿の種類については、大きな変化はみられなかった(図19)。帯は無地よりも柄、袴の色に対して同系色よりも差し色及び反対色を用いる学生のほうが多い傾向であるが、差し色及び反対色の柄の帯を用いる学生が増え、半数を占めるほどとなった(図20)。履物は草履を履く学生が少し増加し、草履とブーツ及び靴の割合が半分ずつとなった(図21)。足袋も平成29年度のほうが増加しており、白足袋を選ぶ学生が9割にまで増えた(図22、図23)。靴は和装用ハンドバッグが減少したが、巾着及び洋装用バッグが増加した(図24)。装飾品については、

ほぼ同じ傾向であった(図25)。

以上の結果から、この5年間で多少の変化はあったものの、半衿や伊達衿の種類、履物、靴、装飾品を着用する学生の割合については大きな変化はなかった。変化したものは白足袋を選ぶ学生が増加したことや、帯が柄の差し色及び反対色を用いる学生が増えたことが挙げられる。また、特徴的な変化としては小振袖の着用が増加し、袴は無地に刺繍入りの袴を選択する学生が増えた。使用する伊達衿の種類に変化はみられなかったが、8割以上の学生が伊達衿を使用するようになったのは大きな変化である。白足袋を選ぶ学生も9割に上り、平成29年度のほうが袴に刺繍が入ったものを好み、シンプルな半衿に伊達衿を入れる学生が増え、足袋もシンプルなものを選択している傾向にあることが分かった。

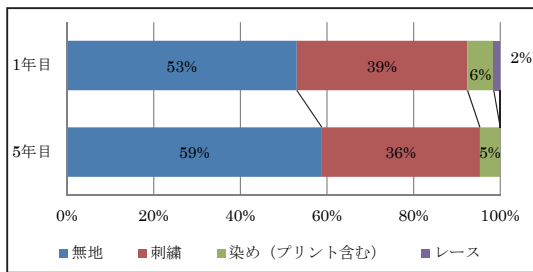


図17 半衿の種類

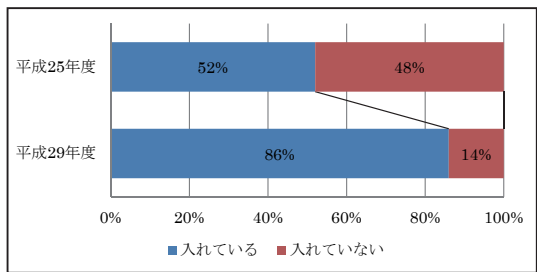


図18 伊達衿の有無

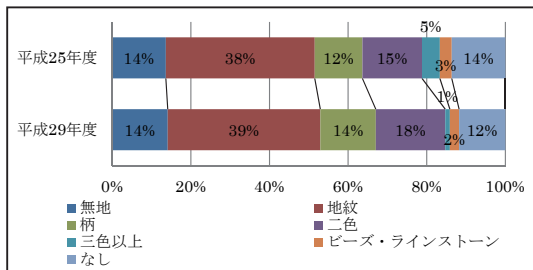


図19 伊達衿の種類

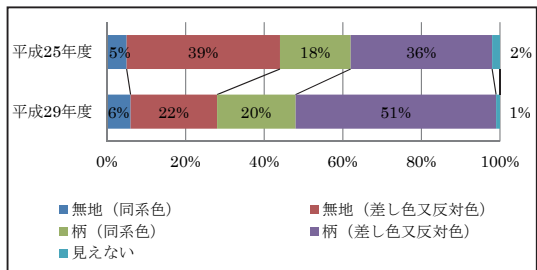


図20 帯の種類

卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅴ

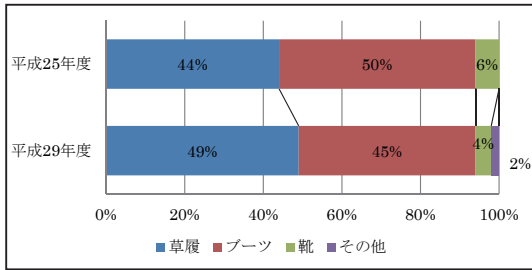


図21 履物の種類

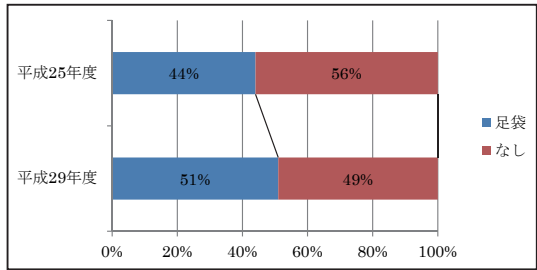


図22 足袋の有無

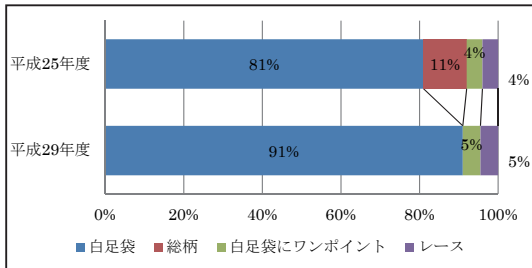


図23 足袋の種類

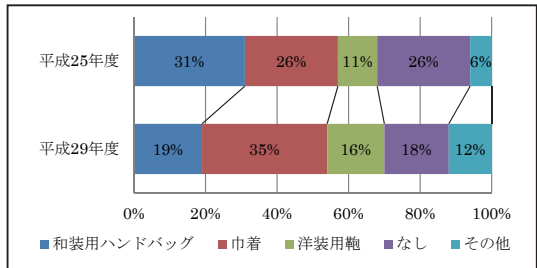


図24 靴の種類

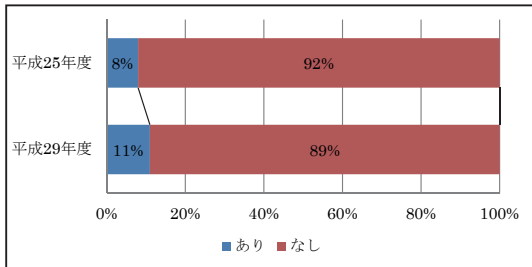


図25 装飾品を着用した学生の割合

3-3 平成25年度の着付けとの比較

平成25年度と平成29年度の袴の着付けを比較する。着付けの基準は拙稿と同様に袴の着装のポイントとなる衣紋、衿合せ、正面から見える半衿の分量(図26)、帯の見える分量、前後袴丈に注目した(図27)。まず衣紋はおおよそ同

じ傾向ではあるが、抜けていない学生と抜けすぎている学生がそれぞれ増加した(図28)。衿あわせについて変化はほぼない(図29)。半幅帯の見える分量については、適当である学生が3割に増加した(図30)。裾丈についても適当である学生が8割に増加した(図31)。

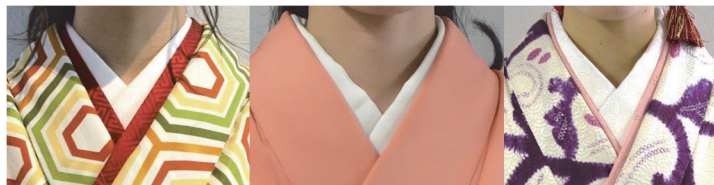


図26 左：基準（1～2cm）の半衿 中央：基準以下の半衿 右：基準以上の半衿

以上の結果から、袴の着付けの傾向に大きな変化は見られなかったものの、衣紋についてはほどよく抜けている学生が減少してしまった

が、半幅帯や裾丈はそれぞれ適当である学生が増加していた。



図27 袴着姿の基準、寸法の基準

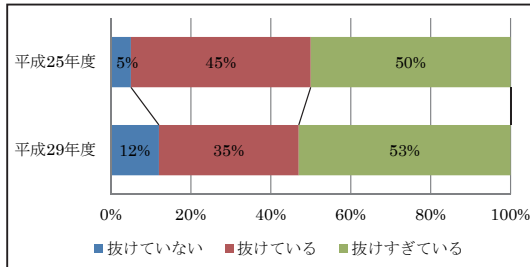


図28 衣紋について

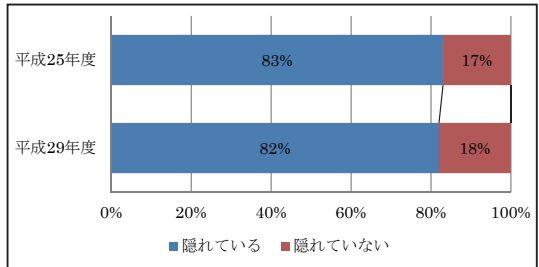


図29 衿あわせについて

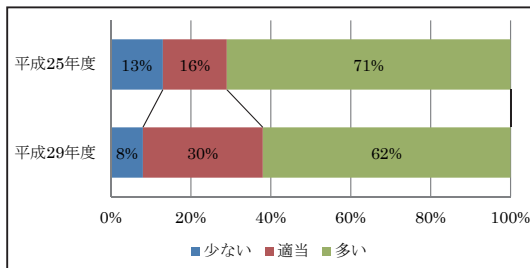


図30 半幅帯の見える分量

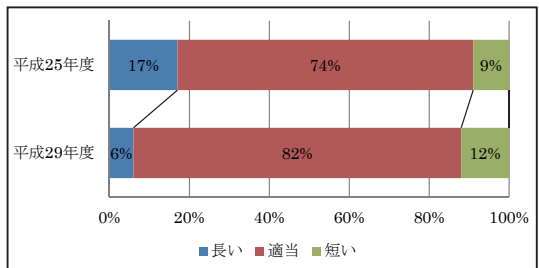


図31 裾丈について

4、卒業生へのアンケート調査の結果

4-1 平成29年度の結果

卒業生へ行ったアンケート調査の結果を分析する。まず、レンタルの有無について尋ねると76%がレンタルしたと回答し、半数を超える学生がレンタルしたものを着用していることが分かった。中でも長着・袴・小物と一式借りている学生が最も多い。レンタルした学生にどこのレンタル業者を利用したか問うと、長着、袴、小物それぞれで共立女子大学に来ている業者を利用した学生が最も多い傾向となった。レンタルにかかった費用では最も多かったのが30001円～50001円で28%、2番目は50001円～70001円で23%、続いて10001円～30001円と70001円～90001円がそれぞれ19%となり、分散した傾向となった。レンタルではなく自分で用意した学生に長着と袴の調達方法を尋ねると、長着は親族・友人のものであると回答した学生が57%と最も多く、次いで購入したが26%、自作が17%となった。一方、袴については購入したが69%と最も多く、自作が13%、親族・友人のものが12%であった。着付けはどこで行ったかでは、レンタル業者を利用した学生が48%と半数を占め、美容室が31%、親族・友人が11%、自分が10%であった。袴について情報はどこから収集するかについてはインターネットが45%と約半数を占め、家族が19%、フリーペーパーが8%、雑誌と友人が7%であった。卒業式をフォーマルな場ととらえているかという問いには96%がはいという回答であった。卒業式でなぜその服装を選んだのかという問いでは、記念になるが63%、式服だからが13%、周りが着ているからが11%と続いた。コーディネートを選ぶ際にはどちらを意識するかという問いでは、ファッションとしてのコーディネートを意識する学生が59%となり、式服よりも多い結果となった。正当な袴のコーディネートを知っている学生は4%しかおらず、知らないと回答した学生が96%を占めた。卒業式の装いについて知りたい

と思うかについては65%が知りたいと回答した。講義を受けるなら3年生の後期が良いという学生が52%で、次いで4年生前期夏前が18%であった。平成29年度の伝統染織技法実習（和裁Ⅲ）を履修した学生には卒業式の袴の装いについての講義をしたが、それを受けた学生の中で参考になったと回答した学生が91%であり、着付けや袴姿のコーディネートが参考になった学生が多かった。

以上の結果から長着・袴・小物を一式レンタル業者に借りる学生が半数近くおり、大学に来ている業者を選択する学生が多い傾向を示した。着付けもレンタルや美容室といった業者を利用する学生が8割に上った。卒業式自体はフォーマルな場だと認識している学生が大多数であったが、コーディネートを選ぶ際にはファッションを意識する学生が6割であった。袴の装いについて知りたいと感じている学生は約7割近くおり、実際に受けた学生のほとんどが参考になったと回答しているため、講義を行うことは非常に有効であることが明らかとなった。

4-2 平成25年度との比較

卒業生へ行ったアンケート調査の平成25年度と平成29年度の結果を比較する¹³⁾。まずレンタルしたものはありますかという問いで、長着・袴・小物と一式借りる学生が増加し、全体の半数を占めるようになった（図32）。袴のみを借りる学生や自分で用意する学生は減少した。袴についての情報をどこから得ているかという問いではインターネットから得ている学生が約半数に増加し、他の収集方法は全て減少した（図33）。コーディネートを選ぶ際にどちらを強く意識したかの項目では、ファッションと回答する学生が多い傾向に変わらなかった（図34）。正当な袴のコーディネートを知っているかという問いに関しても、知らない学生がほとんどで、傾向の変化はみられなかった（図35）。

以上の結果から、レンタル業者で一式借りる学生が増加しており、自ら調達するような学生

は減少したことが読み取れる。また、卒業式における袴の装いに関して、式服としての認識及

び意識に関して、この5年間はほぼ変化がないということも明らかとなった。

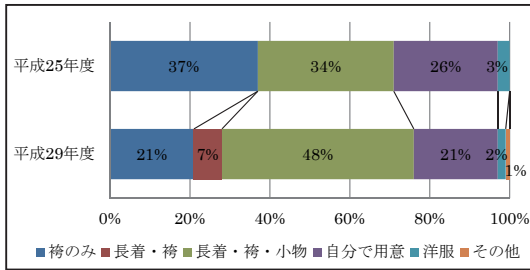


図32 レンタルしたものはありますか

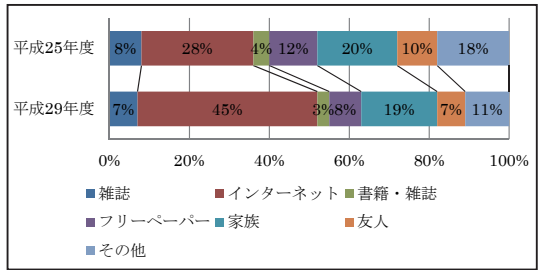


図33 袴についての情報をどこから得ているか

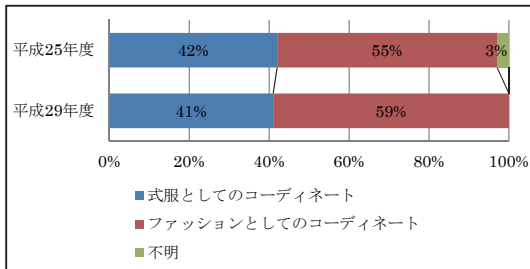


図34 コーディネートを選ぶ際にどちらを強く意識したか

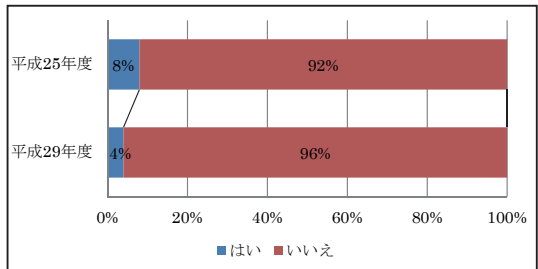


図35 正しい袴のコーディネートを知っているか

5、考察

本研究のまとめとして、この5年間の卒業式の袴姿は、学内で展示しているレンタル業者の影響を受けていることがわかった。記述式アンケートによるとレンタル業者が提案する長着、袴、小物をトータルでレンタルする傾向になったことが明らかとなった(図32)。女子学生はインターネットで袴の情報を収集はするが、最終的には大学内の業者からレンタルを活用しているという結果であった。業者は様々なサービスも提供しているため利便性とお手軽感で利用しているのではないかと考えられる。カタログに掲載されている袴姿と女子大学の装いは、長着は草花の模様が多く使用され、袴は濃い色、特に2017年度は刺繍が多用されていた。髪飾りは大きくないコサージュやつまみ細工のようなものをつけ、白足袋に白の半衿と伊達衿を入れ、足元は草履又はブーツを用いる。このよ

うなレンタルカタログをそのまま切り取ったような袴スタイルが主流となった。

また、カタログには見られない、通常の和装とは異なる小物遣いや色の組み合わせ、こだわりの長着や袴の装いの学生が少数ではあるが存在した。例えば2017年3月の卒業生は、パリのある著名デザイナーが発信した足袋ブーツを想起するものを合わせているスタイルも見られた。さらにインナーとしてブラウスを長着の下に重ね着する装いの出現は本年が初めてである。ブラウスやスカートなどの洋服を合わせるコーディネートは、『KIMONO姫』の最新号でも取り上げられている¹⁴⁾。『KIMONO姫』とは洋服のスタイリストなどを採用し、斬新で素敵、かわいいという感情を表現した着物のスタイリングなどが掲載されている雑誌である。これらのファッション性の強い袴の装いは、アンケート結果からもそれを裏付けることができた。アンケートによると、卒業式当日の装いは式服と

してのコーディネートよりもファッションとしてのコーディネートを強く意識する結果を得ている。なお、本調査の対象は被服学科であるため、和裁やファッションに興味がある学生である。そのためカタログにはない装いを志向する学生が存在すると考えられるため、他学部・学科、他校の情報なども収集して、今後の経過を精査したい。

この少数派の志向が次年度、次々年度へ拡大していく傾向もみられた。これは時系列で調査したからこそ導きだせた結果である。事例をしめすと、刺繍入り袴は、ここ数年増加傾向で、またカタログ掲載においても袴に刺繍がほどこされているものが増加している。刺繍は、2013年のトレンド分析情報として業界新聞に掲載され、その後リアルクローズとして刺繍入りのブラウスやワンピースが売れ筋となった¹⁵⁾。この時期は、刺繍入り袴着装が増加していく時期と概ね合致している。言い換えれば、ファッションのトレンドを反映している、つまりはファッション現象を実証したと言える。

本研究は、5年という期間を継続したからこそ、袴の装いに見られる変化の傾向をとらえることが出来た。卒業式の袴といえば式典に参加するため色紋付に紺の袴といった伝統的な定番の装いを定義としていたが¹⁶⁾、本研究を通して、日常のファッションの流行が色濃く反映される傾向にあることが明らかとなった。

今後の卒業式の袴の装いは、レンタル袴はこのまま学生に利用され続け、カタログに展開される袴の装いを、一式使用する学生が主流であると思われる。本研究を通して、今後レンタルカタログは、レンタルカタログに掲載されていないスタイルを好む女子大生の志向も考えて提供することが必要であると考え。この裏づけとして本学学生のレンタル業者からのレンタルの比率は伸びているわけではないと担当者が述べている。さらにレンタル業者は、学内で同じ長着がレンタルの対象とならないように配慮して、大学限定などの提供や、またレンタル業者

を利用しない学生の実態を把握したいとしている。レンタル業者のこのような試みは、今後の卒業式の袴姿に影響を与えるものと考えられる。

また学生の卒業式に対する意識、認識も今後大きな変化は生じないと思われる。すなわち卒業式は式典であるが、袴の装いは、個性を表現しファッション的に装う傾向が継続するであろう。

このような状況の中、伝統的和服の教育を行う現場では、現在は女子学生の卒業式の象徴となった袴について、歴史的経緯や日本人が培ってきたしきたりや着装を伝える必要性があると考え。例えば、卒業式の和装とは黒紋付、紋付色無地など格のある着物と、紺色の袴を定番として装っていたことなどである。これらのことは女子学生にとっては、和装は格式を重んじるものであると感じるようになるかと推測できる。しかし場やシーンに合う装いは、洋装にも必ず存在する概念である。このようなことを理解したうえで、学生それぞれが一生に一度しかない卒業式の中で装うことの楽しさを実感することを期待したい。

註

1) 田中淑江、長谷川紗織、宮武恵子、現代に見る女子大生の卒業式の袴姿—伝統的着装の変化について—、服飾文化学会誌〈論文編〉、2015、Vol.16、p 1-15

2) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅰ、共立女子大学家政学部紀要、2015、第61号、p11-47

3) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅱ—伝統的な視点から—、共立女子大学家政学部紀要、2016、第62号、p75-87

4) 瀬川かおり、田中淑江、大塚絵美子、長谷川紗織、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅱ—ファッションの視点から—、共立女子大学家政学部紀要、2016、第62号、

p59-71

5) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅲ－伝統的な視点から－, 共立女子大学家政学部紀要, 2017,第63号, p23-35

6) 瀬川かおり、田中淑江、大塚絵美子、太田裕子、長谷川紗織、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅲ－ファッションの視点から－, 共立女子大学家政学部紀要, 2017,第63号, p 7-21

7) 瀬川かおり、大塚絵美子、太田裕子、長谷川紗織、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅳ－色彩の視点から－, 共立女子大学家政学部紀要, 2018,第64号, p39-48

8) 2) に同様

9) 3) に同様

10) 5) に同様

11) 2)、3) に同様

12) 2)、3)、5) に同様

13) 平成25年度のアンケートより29年度ではアンケートは質問内容が増えた。そのため比較は共通の質問のみ行った。

14) KIMONO姫[®]チープシック編,株式会社祥伝社,2017

15) 毎シーズンのトレンドを取り上げている織研新聞の記事では、2013年から2014年秋冬のディテールのトレンドとして10位に刺繍が登場し(織研新聞,13～14年秋冬トレンドチェック結果,2013年12月27日掲載)、その後2014年春夏には7位(織研新聞,14年春夏トレンドチェック結果,2014年7月28日掲載)、2015年春夏には4位になっており(織研新聞,15年春夏トレンドチェック結果,2015年7月27日掲載)、刺繍がだんだんと大衆に広まっていったことが分かる。

16) 1) に同様